

## 書評

川久保 清 著

運動負荷心電図 第2版  
その方法と読み方

富山大学大学院教授・内科学

井 上 博

畏友 川久保清君の運動負荷心電図のテキストが改訂された。著者は運動負荷心電図を専門とし、また一般市民を対象としたメディカルチェックにも長らく携わってきた。その経験を基にまとめられたものが本書である。

初版は2000年6月に上梓された。当時、そして現在も、運動負荷心電図に関する教科書で本書ほど実践的な内容を備えたものを評者は知らない。単著であるため、内容・記述が統一されていて、遺漏がない。多くの読者を得たとみえ増刷されること4回に及んでいる。初版は本文148頁のモノクロ印刷であったが、第2版では本文が163頁に増え2色印刷となった。初版で多くみられたSIDE MEMOの大部分が、第2版では本文として記載されており、2色化とあいまって読みやすくなった。初版より約10年が経過し、この間の進歩や新たなガイドライン、文献が追加されている。

章立ては初版に倣い「運動負荷試験の方法」と「運動負荷心電図の読み方」という2部構成になっていて、方法の部は「運動負荷装置とプロトコル」、「心電図・血圧記録法」、「運動負荷心電図検査の適応と禁忌、負荷中止基準」、

「運動負荷試験時の循環・呼吸反応」、「わが国における運動負荷試験の現状」からなる。読み方の部は「診断的試験の感度、特異度、Bayesの定理」、「冠動脈狭窄の診断基準」、「既知の冠動脈疾患における病態評価、重症度評価」、「心筋梗塞後の患者」、「無症候者の評価」、「不整脈と運動負荷試験」、「その他の適応における運動負荷試験の読み方」、「コンピューターによる自動診断」からなっている。冠動脈疾患に関する項で最も頁数が増加している。

評者は本書を特に次の関係者に推薦したい。当然であるが、循環器の診療に携わる医師である。現在は、冠動脈造影が簡単に行え、CT装置も進歩して冠動脈に関する情報が比較的容易に手に入る。そのため、胸部症状がある患者さんはCTで冠動脈をみて、狭窄がなければ「狭心症ではありません」と説明する。あるいは極端な場合にはいきなり冠動脈造影を行うことすらある。心筋虚血発作の有無の評価は運動負荷心電図ではなく、核医学検査をまず行ってしまふ。評者はこのような診断過程に疑問を持つ者である。安価な心電図や運動負荷試験から有意義な情報が引き出せるのに、より高価

で、しかも視覚的に直感しやすい検査法に頼ってしまう。視覚に訴える検査法の意義(虚血範囲の定量的評価は運動負荷タリウムシンチが優れる)を否定するつもりはないが、もう少し費用対効果(患者側の)にも目を配った診断過程があるのではないかと思う。

次に、運動負荷検査ばかりでなく心臓リハビリテーションにかかわる検査技師・看護師の方々である。初版への杉本恒明先生の書評(週刊医学界新聞、2000年9月11日号)は、見出しを「運動負荷検査と心電図に関わる全ての医療従事者に」とし、末尾近くで「運動負荷検査に携わる医師、臨床検査技師あるいは看護職の方々」に一読することを薦めている。当時もすでに心臓リハビリテーションが保険で認められていたが、現在ほど広く行われてはいなかった。現在、心臓リハビリテーションの施設認定を受けている医療機関は格段に増えている。初版が出た当時に比べ、心疾患のリハビリテーションに携わる医師・看護職員にとって本書の意義は一層大きくなったはずである。

運動負荷試験に携わる医師、検査技師ばかりではなく心臓リハビリテーションに携わる関係者にとって、本書はバイブルといえよう。本書が多くの関係者の座右に置かれて、参考にされることを願うものである。

〔B5判 頁184 2010年 定価5,250円(本体5,000円+税5%) 医学書院刊〕